

特集「四書五経」のリーダー学——中国、韓国、台湾、ベトナムの経済発展のカギは……

# アジアの繁栄と「儒教資本主義」

カリフォルニア大学  
大学院客員教授

中嶋嶺雄

かつてカール・マルクスもマックス・ウェーバーも「アジアの儒教文化と資本主義的發展とは相容れない」と論じた。

しかし日本、NIEESを始めアジア諸国は、堅固に経済発展を続けている。むしろ儒教文化が、アジアの

経済的活力を支えているとさえ言えるのだ。「西歐的資本主義」とは明らかに異なる「儒教資本主義」の可能性は。

## 「アメリカの世紀」の終焉

クリントン大統領でアメリカは大丈夫なのだろうか。アメリカ経済の再建を公約し、「変化」を唱えて選挙戦には圧勝した大統領ではあるが、パフォーマンスが目立つばかりで、「変化」の先行きが一向に見えてこない。果たしてアメリカは再生できるのだろうか。

私が今住んでいるカリフォルニアは、数年前、アメリカの再建を担う牽引車のように期待されたけれど、現在は失業率が十数パーセントにも達し、昨年のロサンゼルス暴動の後遺症も癒え切らずに、アメリカの再建にとっての足枷にさえなっている。

カリフォルニアの凋落は、脱冷戦下における軍需産業の不振と産軍複合体の衰退に起因するといわねばなるまい。冷戦の終焉とソ連の崩壊は、戦後一貫してソ

連と張り合ってきたアメリカの正統性の根拠をも掘り崩してしまったのである。

栄光から傷心へと転じたブッシュ前大統領の後ろ姿は、その象徴的な投影でもあった。

確かに、不況が長期化している日本に比して、アメリカの景気は回復基調にあるように見えるが、アメリカ経済の根本的再建とは程遠く、失業率、貿易収支、国家財政など経済の基本指標を日本と比べてみれば、日本経済がいかに健全であるかが歴然とする。

このようなことを考えながら、今この原稿を書いている私の研究室からも太平洋がよく見える。海に向こうが日本なのだと思つと、あかず眺めてしまうこともしばしばだが、もとよりそこには日本以外にも、台湾、韓国があり、香港、シンガポールがあり、また中国大陸も存在する。つまり二世紀に向けて依然として

経済的活力を保持しつづけている東アジアの世界が、海の彼方にあるのだ。アジアNIEESのなかでは、韓国がこのところ過度の経済成長のひずみで低迷し、中国についてはポスト鄧小平時代への不安が尽きないけれど、相対的に見て、東アジアの経済発展が今世界でもっとも注目されていることに変わりはない。

## 脚光浴びる「儒教文化圏」

アメリカ経済の再生にとって、このよきな東アジアとの関係が重要だとの認識は今やこちらでは誰もが抱いている。私が教鞭をとっている国際関係・太平洋研究大学院（IR/PS）などは、まさにこのような認識に基づいて設立されたものであり、東アジアのサクセス・ストーリーの謎を学問的にも解き明かそうというわけである。

第二次大戦後、世界の多くの国々が政

治的独立を達成した。次いで経済的独立と経済発展を志向したけれど、今日でも多くの国々は貧困と経済の後進性に悩んでいる。とくに一九七〇年代から八〇年代初頭にかけての二度にわたる石油危機を経過してみると、アジアNIEESだけが工業国国家群に仲間入りし、他の諸国はドロップ・アウトしてしまった。

こうして日本だけがアジアで近代化・工業化に成功した例外だと長く語られてきた時代は一九六〇年代までで終わり、七〇年代にはアジアNIEESが、八〇年代には中国大陸沿岸が、そして九〇年代にはベトナムまでもが経済発展の局面に入ろうとしている。

このような現実に直面して、これら地域の経済発展の要因を解明するために、これら地域に共通する文化的・歴史的背景に照明を与えようとする試みが内外でなされてきたのは、当然であった。「儒

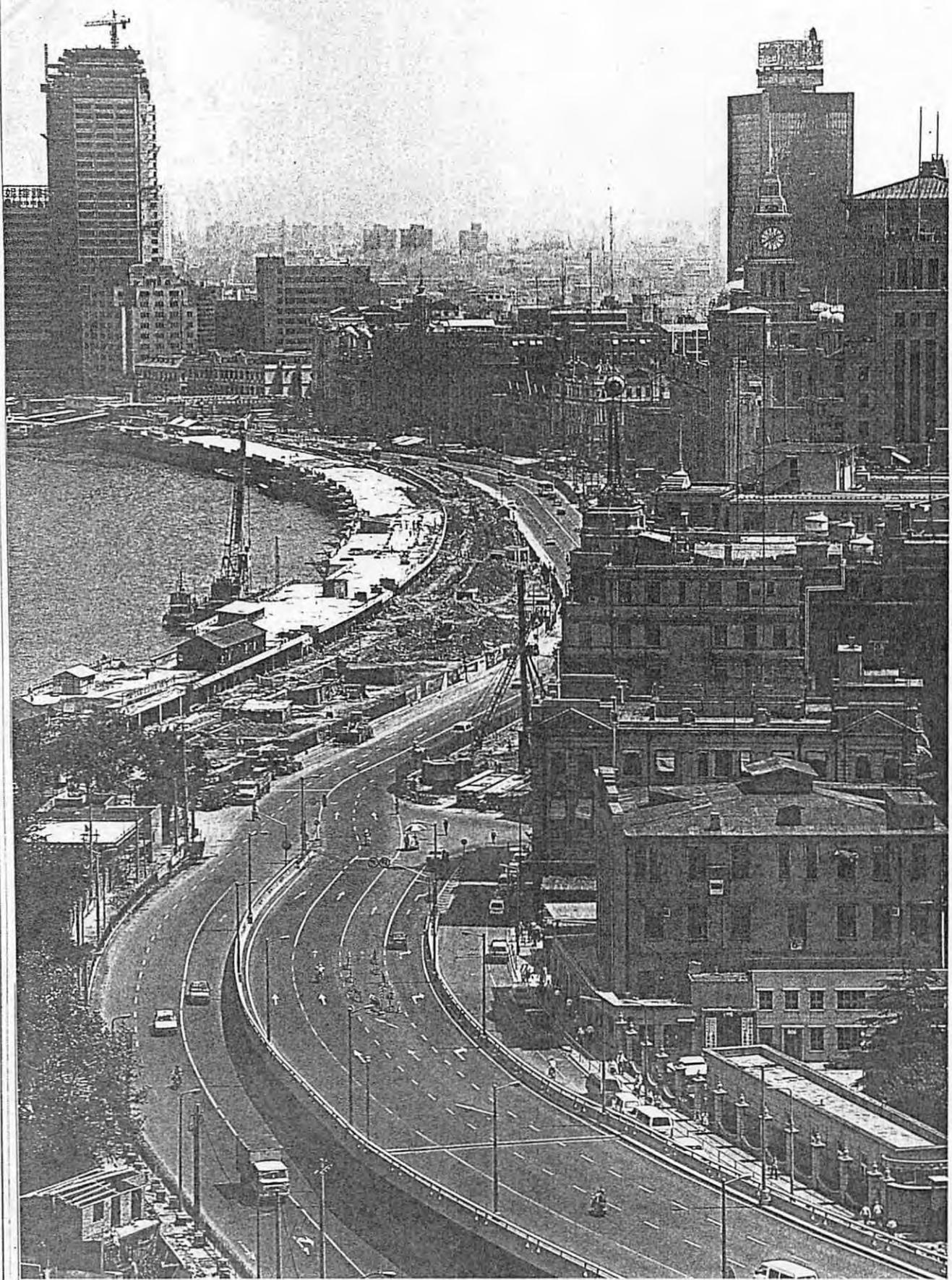
「教文化圏」という発想がその一つであるが、最近では「儒教資本主義(Confucian Capitalism)」という見方も提起されはじめている。

私自身、一九八七―九〇年にかけて、文部省科学研究費重点領域研究「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」(略称:「東アジア比較研

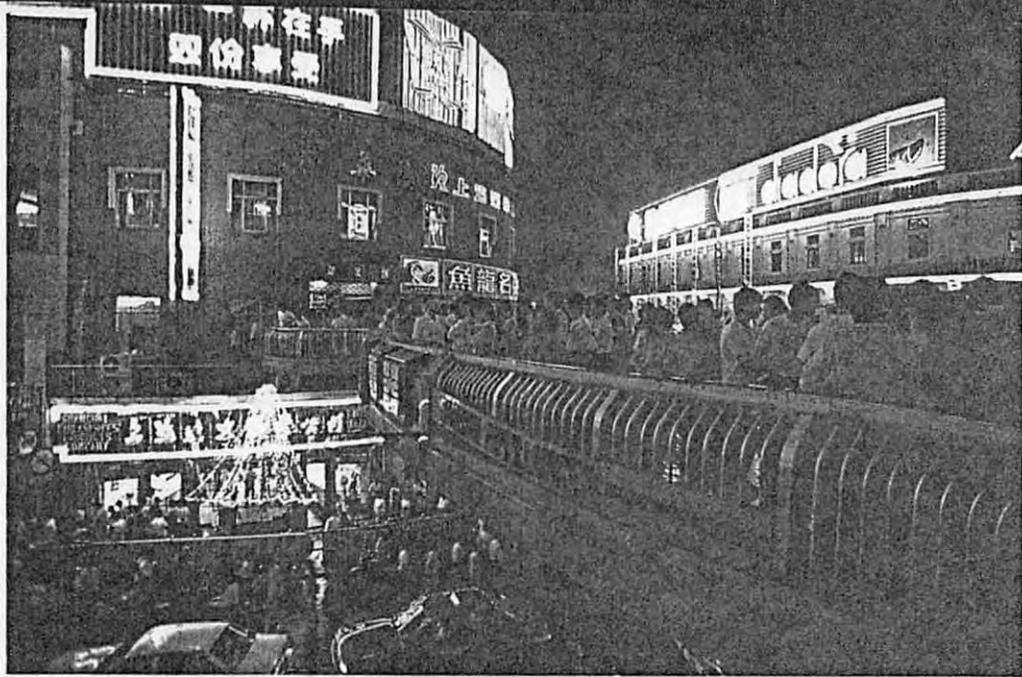
究」)の研究代表者として、この問題での国内外の討論に加わってきたので、ここではそれらの論議も踏まえながら論じてみたい(なお、「東アジア比較研究」の

一応のまとめは、拙編著「東アジア比較研究」、日本学術振興会、一九九二年、参照)。  
東アジアの経済発展の背景として、これら地域に共通する文化に着目すること

撮影はいずれも中塚裕



長期的な経済の凋落傾向にあえぐ欧米諸国を尻目に、アジアは高い活力を保持し続けている。写真はいずれも中国の経済中心地・上海。



儒教の「集団主義」「教育熱心」「寛容さ」はいずれも経済発展に大きく貢献した。

の地域を漢字文化圏、もつと噛み砕いていえば、「箸を持つ文化」を共有している地域だといってもよいであろう。地理的には、中国大陸はもとより、日本、台湾、韓国、北朝鮮、香港、マカオ、シンガポール、それにベトナムなどの地域があり、東南アジアの華人社会もそこに含めるべきであろう。

この場合の儒教文化は、儒教の思想や倫理が社会秩序の規範として共有されてきた歴史的体験を有するということであって、必ずしも儒教や儒学そのものことではない。

日本の近代化に関する評論で知られ、日本の経済的・社会的発展と儒教文化との関係を論じた『日本を真

は、きわめて興味深いテーマであるだけに、あらかじめ一定の前提を設定しておかねばならないであろう。なぜなら、国際社会の現実や諸地域の発展を文化論の尺度で論じる場合、当面の解釈に必要な文化的傾向のみを恣意的に抽出しがちであったり、またしばしば低俗な文化主義に堕しやすいからでもある。

さて、私がここでいう「儒教文化圏」とは、いうまでもなく中国文化の影響を受けてきた地域である。したがって、こ

発展」、「東アジア比較研究」第三回全体会議、一九八九・九・一九。

このような儒教文化を共有してきたのが東アジアの「儒教文化圏」であるが、そのことは、これら地域の社会的発展が歴史的に儒教文化と密接な関係を持ってきたということであり、そのような儒教文化が東アジア地域の今日の経済発展にとって効果的なファクターになっているのではないかと考えておいて、儒教や儒学がそのまま経済発展を保證するということではあり得ない。孔子廟や「論語」と現代社会の経済発展とは、直接の関係はないのである。

また同様に、いかに「儒教文化圏」としての伝統を有していても、中国や北朝鮮の現実が証明しているように、社会主義のシステムを選択している限り、経済のダイナミックな発展はあり得ない。改革・開放を唱える中国の最近の経済成長が目ざされているけれど、中国の経済が発展し始めたのは、この国が実質的に脱社会主義の方向を歩み始めたからである。しかしながら、社会主義の負の遺産のツケは大きく、同じ中国人社会でも、香港や台湾と比べると、一人当たりGNPでは約三〇分の一にしか過ぎない。

### 現実が理論を乗り越えて

「儒教文化圏」と経済発展との関連を論じるに際しては、右に見たような留保が必要であろうが、しかしながら、そのことは、今日の東アジアの経済発展とその活力が儒教文化と深く関連していないと

いうことでは決してない。しかも従来、「儒教文化圏」は学問的に見ても、工業化や経済の資本主義的發展に適さないと見做されてきたのであるから、今日の東アジアの発展は、現実が理論を乗り越えてしまったことになる。

よく知られているように、東アジアの世界を「アジア的停滞」と見做したマルクスはもとより、中国についての深い学識を示したマックス・ウェーバーも、「儒教文化圏」は資本主義的發展と相容れない、と論じていた。

ウェーバーは、人間の内面的エートスに発するピューリタニズムを「内面的な品位の倫理」として高く評価し、現世との緊張関係のなかでそれを積極的に変革しようとする志向こそが資本主義の発達を促す根本である、と考えていた。これに対して、形式や儀礼にとられる「外面的な品位の倫理」としての儒教の合理主義は、現世に対してそのまま順応しようという消極的なものであり、「儒教文化圏」は禁欲的な功利主義に立脚した責任倫理を欠くために、近代産業資本主義の発展には結びつかない、と強調していたのである。

このような学説が正しいとすると、東アジアの「儒教文化圏」諸国は、産業資本主義的發展の道を進めるのではなく、日本の江戸期の町人文化や中国社会に特有の流通ネットワークを基盤とした商業資本主義的發展の道を切り開く以外になかったのかもしれないが、現実には日本がいち早く工業化に成功し、すでに見た



ここ上海市東岸の新工業区の開発計画では、2030年までに1000億円の投資が予想される。

ようにアジアNIEsも七〇年代以降、比較的安い労働賃金による加工貿易によって経済的急成長の局面を形成し、こうして東アジア全体が今や製造・金融・流通の世界的な一大センターになっている。こうした東アジアの今日的活力とその現実を、「儒教文化圏」に関する右のような従来の学説に照らしたとき、なおさら注目し値するといわねばなるまい。

もとより「儒教文化圏」といっても、同じ「箸を持つ文化」を共有していなが

ら、使い捨てにはしない中国の長い箸、使い捨てを良しとする日本の木の割り箸、細い金属（銀）製の朝鮮の箸とそれぞれ異なるように、国によってさまざまな違いがある。同じ儒教文化をどのように受けとめるかについても、国民性による違いがある。

### 「忠」「義」を重んじる日本人

ロンドン大学の森嶋通夫教授は、著書『なぜ日本は「成功」したか？』（TBSブリタニカ、一九八五年）のなかで、「中国は文治儒教国であるが、日本は武治儒教国といわねばならない」と語っている。また、儒教文化は、法治主義と徳治主義を両輪にしてきたといわれながら、この点について

も中国と日本では大きく違っていて、中国人の場合には、「君子、法を犯して民と同罪」という言葉が示すように、支配者も庶民も日常的に法を無視して平然たるものがあり、それを背徳とは感じない。法意識、法感覚が日本人と中国人とでは大きく異なっているからだとはいえよう。肝心の儒教の徳目をとってみても、それぞれの国によって受けとめ方が異なる。「忠」「孝」の二道

を基礎とし、「仁」「義」「礼」「智」「信」の五徳を支柱とする儒教の徳目を取り出してみると、日本や朝鮮では「忠」の意識が伝統的に中国よりも強かったが、とくに徳川幕藩体制下の日本の武士の「忠」は、中国の士大夫や韓国の両班（ヤンバン）のそれとも大きく異な

って鮮烈であった。「儒教の精神」（旧版岩波新書、一九三九年）の著者、武内義雄博士は、「支那の五倫は家族本位で孝が重んぜられるに對し、日本の五倫は国家主義で忠孝の一致が提唱され、孝より忠が上に立っている」と述べている。この「孝」の意識は、最近の日本では薄れているといえようが、韓国では依然として根強く、年長者を敬う「長幼有序」の伝統が生きている。

人間の自然な情愛に基づく真心としての「仁」は、孔子もこれを仁徳として最高の徳目に位置づけていた。このいわば儒教的人道主義の大本としての「仁」は、日本ではあまり馴染まないが、中国では非常に重視される。「儒教文化圏」諸国は、「礼」という共通の観念を持っているが、とくに中国人は「礼」を重んずる国民である。これに対して日本人は、「義」をもっとも身近な徳目として生きているといえよう。

以上に見たように、儒教の徳目の受けとめ方においてさえ、互いにこのような違いがありながらも、「儒教文化圏」諸国は、その全体としての文化的同一性のなかで、今日、大きく発展し成長してきている。

### 「集団主義」と「教育熱心」

それでは、このような「儒教文化圏」諸国のどのような共通性、どのような特徴が経済発展と結びつくのであろうか。名著『儒教文化圏の秩序と経済』（名古屋大学出版会、一九八四年）の著者、金日坤教授（韓国・釜山大学）は、「儒教文化の一番大きな特徴は、家族集団主義による社会秩序にある」と強調している。同教授はまた近著『東アジアの経済発展と儒教文化』（大修館書店、一九九二年）

のなかでこの点を、「東アジアは、儒教的な集団主義の文化によって資本主義のシステムを動かし、経済の発展に成功した。しかも、伝統的な集権的秩序によって、経済発展を軌道に乗せたのである。これは、欧米の自由企業制度による民間主導の経済発展とは異なり、政府の主導による発展である」と述べて、まさに「儒教資本主義」とでも呼ぶべき特質を明らかにしようとしている。

儒教的倫理と結びついた家族集団主義が「儒教文化圏」諸国の経済発展の支えになっているという問題提起は、きわめて重要である。

このような家族集団主義が、たんに労働の組織としてはなく、企業成員の組織化をもたらしつつ企業経営の規範になっていることは、東アジア諸地域の中小企業のみならず、今日のわが国の大企業にも見られるところである。

この点はまた、三井、住友など後に日本の財閥を形成するにいたった江戸期の

大町人の系譜を辿っても明らかであり、韓国の財閥群の形成過程にも該当するといえよう。この場合、儒教的「中庸」の精神もしくは「和」の志向が、企業活動の重要な凝集力・親和力になっていることも見逃せない。終身雇用制や年功序列賃金制、企業別労働組合といった日本型労働関係を、儒教的な家族集団主義との関連で論ずることもできよう。

「儒教文化圏」の第二の特徴は、学習主義、あるいは学習集団、学習国家ということである。わが国の学問にも儒教の影響が圧倒的に強く、とくに朱子学をはじめとする新しい教義解釈の儒学流派が、日本の近代的思维の形成と近代化の過程に大きな意味をもったことはよく知られている。

中国においても、科挙の試験を始めとして、儒教文化が徹底的に学習されてきた。この場合、「儒教文化圏」諸国に共通する漢字学習のもつ教育的・社会的効果が大きいと重視されねばならないように思われる（漢字文化や漢字学習のもつ意味の重要性についての私自身の発言は、「漢字文化を考える」儒教ルネッサンスを考える「漢字文化圏の歴史と未来」、いずれも大修館書店刊、参照）。

学習主義、学習集団、学習国家という志向は、そもそも儒教の経典「論語」の巻頭が「学びて時に之を習う」という「学而篇」から成っていることに端を発しているともいえようが、結果的には中国大陸を別とした現在の東アジア諸国の識字率、就学率、教育水準の高さに繋が

っている。

その結果、今日でも日本をはじめ台湾、韓国などのNIE S諸地域では、知識集約的な社会的土壌が中央・地方を問わずに存在し、受験システムを含めた日本型学習国家への指向が全般的な傾向になっている。そのため弊害もしばしば指摘されているとはいえ、この点が近代化、工業化、情報化のためのノウハウの開発、インフラストラクチャーの整備や情報ネットワークの形成にきわめて大きな意味をもっていることはいうまでもない。

このように見てくると、漢字学習の重要な意義を革命の大義のために解消して過度の簡略化を遂行した「毛沢東思想」に基づく中国の文字改革が、識字率の向上にほとんど繋がっていない現実を改めて問わねばなるまい。幸いにして中国では最近、漢字の過度の簡略化の中止、香港・台湾や東南アジア華人社会との経済交流に起因する大陸沿岸部での正漢字の復活傾向が見られることは喜ばしい。

### 「儒教資本主義」とは何か

経済発展と関連した儒教文化の特徴として第三に指摘し得ることは、そもそも儒教は信仰の対象であるよりは、一つの倫理的規範であることである。

アジアの経済発展との関連で見た儒教文化の真髄は「家族 (family)」、「礼 (rite)」、「高級官僚制度 (mandarinate)」にある、と鋭く析出しているフランス・アジア学界の碩学、レオン・ヴァンデルメールシュ教授は、その著「新しいシナ

的世界 (Le nouveau Monde sinisé)」（邦訳「アジア文化圏の時代」大修館書店 一九八七年）のなかで、「儒教的共同体主義の著しい特徴の一つは、宗教的信仰に全く煩わされないことである」と述べている。儒教は厳密な意味での宗教ではないがゆえに、日本では神道との共存が可能であり、中国では道教との共存が可能なのであった。つまり儒教は、きわめて寛容なドクトリンなのであって、信仰であるよりは社会的な規範であり、道徳律であるところに特徴がある。

こうした他宗教に対する寛容さと宗教的非拘束性は、たとえイスラム教やカトリックに比べて決定的に際立っているが、そのような儒教のゆるやかな行動規範が、本来的に現世肯定的な儒教的合理主義の精神と結びついて、一種の実学志向と経験主義を導き、工業化・産業化のための基盤整備に大いに役立ったのではないかと思われる。

江戸中期に「営利」の思想を肯定して町人階級に影響を与えた日本の新しい儒学流派・石門心学を学び、「仁義」と「富貴」を二者相容れるものとして「論語」を積極的に読み替えたという日本実業界の先駆者・渋沢栄一には、「論語と算盤」（復刻版、国書刊行会）と題する名著がある。渋沢はこの点で儒教的倫理と経済的合理性とを結合しようとし、それを自らも実践したのであって、そこに見られる「義利両全」「致富経国」といった倫理感と実業思想には、まさに今日の「儒教資本主義」のアンゲルから、改め

て光が当てられるべきであろう。

### アジアの新しい可能性を探る

いずれにせよ、「経済」という言葉そのものが「経世済民」「経国済民」という儒教思想に発していることに示唆されるように、儒教の教義や儒教文化は今日、東アジア諸国の経済発展にとって重要な精神的支柱となり、労働と生産、売買と交易の倫理的規範となつて、その社会的活力を内面から支えていると見做すことができよう。

もとより、すでに詳しく見てきたように、儒教や儒教文化がそのまま経済発展に繋がるといった短絡はできない。各国各地域の経済発展の要因はさまざまであるが、ひとたび離陸（テイク・オフ）が開始された社会においては、儒教文化の伝統を有することが経済的・社会的発展の促進要因・充足要因になっていることを確認できよう。それを「儒教資本主義」と呼ぶかどうかは別にして、少なくとも、欧米の資本主義とは異なったタイプのアジア型資本主義を今日かなりはっきりと見分けることができるようになってきている。

香港の啓徳空港でもよい、台北の蔣介石国際空港でもよい、あるいはシンガポールの空港でも、ソウルの空港でもよい、同じようなビジネス・カルチャーに身を装ったアジアの国際ビジネススマンや、最近ではビジネスウーマンたちが、今日も足速に颯爽とトラップを上って行く。